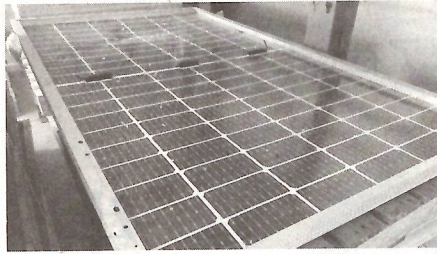


# 三菱ケミ 銀・ガラス回収し循環網

## 太陽光パネル 安価に再活用

三菱ケミカルグループは使用済みの太陽光パネルを高温処理し、ガラスや金属などの素材を安価にリサイクルできる技術を開発した。粉砕して素材を分別回収する従来技術に比べてコストを2〜3割低減できる。脱炭素時代に必要な資源循環の



新菱は太陽光パネルの処理能力を高める

新たな供給網を整える。全額出資子会社の新菱（北九州市）がリサイクル事業を展開する。新菱はパネルの各構成部材を接着する樹脂製の封止材を高温でガスに変える技術を開発した。ガラスや銀や銅、アルミなどの素材を容易に回収しやすくなる。

分別回収したガラスはガラス繊維の断熱材の材料として、銀や銅、アルミは資源としてそれぞれ再活用する。パネル素材の99%を利活用できる。パネルを破砕して素材を取り出す従来の方法に比べて新技術は連続操作が容易で、コストを低減できる。

12年に始まった固定価格買い取り制度（FIT）で太陽光発電施設は急速に拡大した。パネルの耐用年数は20〜30年とさかれ、30年代半ばに一斉に寿命を迎える。使用済みパネルは現在、埋め立て廃棄が主流だ。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）によると、36年ごろに20年時点の100倍近い17万〜28万トンのパネル廃棄物が発生する。太陽光発電は再生可能エネルギーの主力電源なため、パネル素材の資源循環の国内での構築は欠かせない。新たなリサイ

クル方式を使えば、1メガワットの太陽光発電所のパネルを再生する場合、埋め立てよりも約200トンの二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量の削減効果がある。新菱は25年以降に新技術を活用したリサイクル拠点を順次増やす。三菱ケミカルは敷地を活用し、福島県や三重県四日市市などが候補地となる。

北九州市にある既存拠点の処理能力も30年までに2倍に増やす。新設拠点と北九州市の拠点を処理能力を合わせ、年間従来比3倍の最大27万枚（約4300ト）のパネルを扱えるようになる。発電事業者にはパネル廃棄費用の積み立てが2年から義務化されている。新菱は埋め立て処分より有用性が高いことを発電事業者にアピールし、パネル素材のリサイクル需要を取り込みたいと考えた。